アジア・キリスト教・多元性　現代キリスト教思想研究会
第16号　2018年3月　59～81頁

解放前後の韓国におけるカール・バルトの受容と理解
――日韓のキリスト教出版界の比較を中心に ――

洪　承　杓

はじめに

カール・バルトの神学は、現代の神学界に大きな反響を呼んだ重要な神学であると言える。彼の神学を欠いては現代神学の動向と性格について語ることができない。しかし、バルト神学が韓国教会に受容され、議論される過程は決して順調ではなかった。欧州では極端な保守主義者として、北米では聖書の啓示論と霊感説に対して問題の多い自由主義神学者として誤解され、[1]朴ソンギュによると「自称・正統主義者たち」はバルトの神学を「新神学」あるいは「自由主義神学」とみなし教会政治的に利用して…根本主義的アプローチによってバルト神学を正確に理解できずに彼の神学への歪曲と誤解を持続してきた。[2]保守的な来韓宣教師たちが教会内部を支配し、朝鮮総督府の検閲と統制の下に置かれた韓国キリスト教会と神学界は、バルト神学の実体を十分に把握することができず、神学的な分析と討論に限界があった。韓国における第1世代のバルト神学受容者の一人である池東植もバルトの著書『キリスト者の生活』(그리스도인의 생활、1954)をハングルで出版した時、訳者のあとがきで次のように韓国キリスト教界におけるバルト神学受容の厳しさを指摘する。

> 「我が国(韓国-筆者註)でもカール・バルトと彼の神学が議論されてからすでに長年経ち、特に最近になってはあちこちで彼に対する賛否両論が激化している。 しかし、残念ながらこのようなすべての論議は、たいてい道聴塗説を脱することができず、直接バルトの著作に接している人々は、ごく少数の学徒に過ぎないだろう。その結果、幾多の人々はただ気分的にバルトと彼の神学に対して賛意を表明したり、そうでなければ噂だけを聞いてそれを忌避する事情があるのではないかと思う。これについて訳者は、現代において最も指導的な立場にいる彼の著作が一日も早く国語(ハングル-筆者註)に紹介されることを心より願い

[1] 김영관, “칼 바르트(Karl Barth) 神学의 韓国에서의 受容過程에 関한 歴史的 考察”, 『神学思想』、2009年冬号、p.74.

[2] 박성규, “칼 바르트(Karl Barth) 神学의 研究動向을 通해 본 韓国 神学의 地形 分析 - 韓国에서의 칼 바르트(Karl Barth) 研究 1世代를 中心으로,” 『組織神學論叢』第37集、韓国組織神学会、2013年、pp.175-210.

ながら、有力な学徒達にこの努力を促したことは一回二回ではない。」[3]

このような風潮は解放以後も続き、韓国教会ではバルト神学が漠然と「気分的に」あるいは「噂を聞いて」、良い印象を持たれない状況を乗り越えることができなかった。これは日本の植民地時代の思想統制と保守的な来韓宣教師たちの神学検閲によって韓国の神学界が当代の世界神学の流れと十分にコミュニケーションできなかった結果であった。

本論考は、バルト神学に対する韓国キリスト教の受容過程において、バルト神学を先に受容した日本の神学界が韓国のキリスト教界に及ぼした影響をキリスト教出版の動向分析を通して考察する。同時に、このようなバルト神学の受容過程と風潮が解放以後の韓国キリスト教のバルト神学受容過程にどのような影響を与えたのかについても考察する。

1. 戦時下におけるカール・バルトの神学受容過程と日韓の出版動向

1) 「内地神学」としてのバルト神学

近代日本は、欧米の書物を大量に翻訳し日本語で紹介することによって、あえて西洋を直接経験せずとも、いわゆる「内地」で翻訳された成果のみによって「近代性」を体得できるようになった。[4] このような背景から、洪伊杓(ホンイピョ)は、「植民地支配下で韓国の牧師や神学者が日本の神学校(神学部)で学び、いわゆる「内地神学」を一次的に経由した後帰国する人が多かったが、二次的に欧米の神学を直接学ぶため留学に行く場合があった。このパータンは、西洋の近代性を東洋で唯一先導していた日本を近代文明の核心的な場としての「内地」と設定し、周辺の植民地(外地)民が近代文物を習得するためには必ず先に内地を経験するよう誘導した結果」[5]であったとしている。

そのような西洋の成果のうち、英文書籍以外に日本のキリスト教界に最も大きな影響を与えた言語はドイツ語であった。日本は明治維新以来、イギリスとフランスなどを模倣したが、富国強兵を追求する近代日本の国家体制が、全体主義的なドイツのシステムに適合できるという判断のもと、司法、教育、行政など多様な近代システムをドイツ式に変化させて行き、その過程で多くのドイツ留学派がドイツの文物を積極的に受け入れて行った。このような風土の中で、日本の学界でもドイツの学問の方法論を踏襲し始め、哲学はドイツ哲学、神学はドイツ神学、法学はドイツ法学が支配する風土が形成された。このような傾向は植民地時代の韓国にそのまま移植され、現在も韓国の学界、法曹界、社会全般がこのような風土から自由ではない状態である。[6]

---

[3] Karl Barth, 池東植 訳, 『그리스도人의 生活』(서울: 思想界社, 1954), 「譯者後記」参照.

[4] 丸山眞男, 加藤周一, 任城模訳, 『飜譯과 日本의 近代』(서울: 이산, 2000); 최경옥, 『飜譯과 日本의 近代』, (서울: 살림, 2006)などを参考。

[5] 洪伊杓, "日帝下 韓國 基督教의 日本認識: '內地' 槪念을 中心으로," (延世大学博士論文, 2014), 250.

[6] 姜大石(カン・デソク)が語った韓国哲学界の風土に対する最近の指摘を参照。; 「今までの韓国の哲学

ドイツ思想に関する日本のこのような関心は、1930年代に起こった「15年戦争期」にバルトへの教界全体の熱狂的な関心から、バルト神学関連の訳書が溢れ出たことによる。バルトがドイツで新刊を発表すれば、ほぼ同時に翻訳されるほどであった。1930-40年代の日本の神学界はまさにバルト神学の全盛期であった。ゆえに、日本のキリスト教出版界もバルト書籍で溢れるようになる。それに比べ、韓国のキリスト教出版界は英文書籍さえ宣教師の統制下で基礎段階の神学書籍と信仰書籍の翻訳出版にとどまっていた。したがって、最近の神学の動向を把握するための重要な神学書籍の翻訳や紹介は十分ではなかった。その中で主体的にドイツ語を解読して翻訳できる人材も確保できない状況であった。

下表から、1930年代から45年までの15年間、日本においてバルトの訳書と研究書が急速に出現し、韓国出版界ではバルト書籍が一冊も紹介されていないことが確認できる。

<戦時下におけるカール・バルト書籍の出版動向比較>

区分	日本	韓国
1930年代	『義認と聖化』(1932) 『バルト神學要綱・ロマ書』(1933) 『福音主義的教會の危急』(1933) 『教會と文化』(1934) 『バルト神學概論』(1935) 『我れ信ず』(*Credo*, 1936) 『神を求めよさらば生くべし』(1938) 『バルト説教選集』(1938)[7]	無し

界では主にカントからヘーゲルに至る観念論、そして現代に至ってはフッサールやハイデッガーなどの現象学に限定させてドイツの哲学が研究されたり紹介されている。(…)なぜ韓国の哲学は難解ながらも多くの限界を持っているドイツ観念論に愛着を持っているのだろうか。(…)第一、我が国に西洋哲学が紹介されたのは主に日本植民地統治を通して行われた。日本は軍事的、文化的にドイツと親しかった上、ドイツ観念論哲学を高く評価した。ドイツ観念論の政治、経済的な問題を哲学から排除し、主に認識論や道徳論に集中していたため、植民地国家の知識人たちがそれを習得するとしても、植民統治に反対する抵抗運動には大きな影響を及ぼすことはなかっただろう。哲学者たちが象牙の塔の中で純粋哲学に陶酔し、現実問題に目を向けなくても良かったからだ。」; 姜大石, 『왜 唯物論인가 : 맑스 以前의 獨逸 唯物論哲學을 中心으로』(서울: 中原文化, 2012), p.1.

[7] カール・バルト, 松尾相譯, 『義認と聖化』(東京: 長崎書店, 1932); カール・バルト, 丸川仁夫譯, 『バルト神學要綱・ロマ書』(東京: 新生堂, 1933); カール・バルト, 松尾相譯, 『福音主義的教會の危急』(東京: 長崎書店, 1933); カール・バルト, 松尾相譯, 『教會と文化』(東京: 長崎書店, 1934); ジョン・マッコナッキー, 岸千年, 園部不二夫共譯, 『バルト神學概論』(東京: 新生堂, 1935); カール・バルト, 桑田秀延譯, 『我れ信ず』(キリスト教思想叢書刊行会, 1936); カール・バルト, ツルナイゼン共著, 小山誠太郎譯, 『神を求めよさらば生くべし』(東京: 長崎書店, 1938); カール・バルト, 松尾相, 久保田豊武編, 『バルト説教選集』(東京: 長崎書店, 1938).

1940-45年	『キリスト教生活: 附誡命の遵守』(1940) 『神学の根本問題』(1940) 『教會と諸教派』(1941) 瀧澤克己,『カール・バルト研究: イエス・キリストのペルソナの問題』(1941) 『『神の言と神學』(1941) 『ルカ傳第一章に關する四つの聖書研究』(1941) 福田正俊,『恩寵の秩序』(カール・バルトの神学に関する研究, 1941) 『福音と律法』(1942) [8]	無し

2) 植民地時代における韓国キリスト者のカール・バルト神学の受容

韓国のキリスト教界に本格的にカール・バルトの思想が紹介されたのは、1930年代初期である。その内容は次の通り。

著者(翻訳者)	タイトル	収録誌名	収録時期	内容
チェビルグン 蔡弼近	변증론적 신학을 소개함 (4回連載) 「弁証論的神学を紹介する」	「基督申報」	1932.7.29.- 8.10.	バルト神学に関する紹介
チェテヨン 崔泰瑢	칼 바르트의 '의인과 성화' 「カール・バルトの義認と聖化」	영과 진리 「霊と真理」	第49号, 1933	書評、バルト神学に対する主体的な批判模索
ジョンギョンオク 鄭 景 玉	위기신학의 요령 「危機神学思想の要領」	「神学世界」	第17巻 第5号, 1932	組織神学的な関心からバルトを紹介
ジョンギョンオク 鄭 景 玉	위기신학사상의 연구 「危機神学思想の研究」	「神学世界」	第21巻 第3号, 1936	

[8] カール・バルト, 宮本武之助譯, 『キリスト教生活: 附誡命の遵守』(東京: 長崎書店, 1940); カール・バルト, 菅円吉訳, 『神学の根本問題』(東京: 三笠書房, 1940); カール・バルト, 山本和譯, 『教會と諸教派』(東京: 長崎書店, 1941); 瀧澤克己, 『カール・バルト研究: イエス・キリストのペルソナの問題』(東京: 刀江書院, 1941); カール・バルト, 蘆田慶治 外共譯, 『神の言と神學』(東京: 長崎書店, 1941); カール・バルト, 松谷義範, 秋山憲兄共譯, 『ルカ傳第一章に關する四つの聖書研究』(東京: 長崎書店, 1941); 福田正俊, 『恩寵の秩序』(カール・バルトの神学に関する研究)(東京: 長崎書店, 1941); カール・バルト, 高橋詢訳, 『福音と律法』(東京: 長崎書店, 1942).

ビョンホンギュ 卞 鴻圭	하나님의 말씀과 신학 「神の御言場と神学」	「神学世界」	第19巻 第2号, 1934	聖書註釋学にバルトの保守的な聖書解釈の観点を適用することに関心を持つ。

上表で注目されるのは、蔡弼近(チェビルグン)と崔泰瑢(チェテヨン)が日本への留学時代にバルトをはじめて知り、1932年に蔡が『基督申報』に「弁証論的神学を紹介する」というタイトルで4回連載(1932.7.29-8.10)でバルト神学を紹介し、崔は「カール・バルトの義認と聖化」という書評を『霊と真理』(1933)に掲載することによりバルト神学に対する主体的な批判を模索した。鄭景玉(ジョンギョンオク)は『神學世界』に「危機神学思想の要領」(1932)と「危機神学思想の研究」(1936)という二編の論文を通してバルト神学を紹介している。 さらに卞鴻圭(ビョンホンギュ)は同じく『神學世界』にバルトの論文である「神の言葉と神学」(1934)を翻訳し紹介した。メソジスト神学校の鄭は組織神学的な観点からバルトを紹介し、卞は自らの聖書注解学にバルトの保守的な聖書解釈の観点を適用することに関心を持っていた。[9]鄭と卞は直接的にドイツと関わりのないまま、鄭はアメリカ・シカゴのガレット神学校(Garrett-Evangelical Theology Seminary)在学中、卞はドゥルー一大学(Drew University)在学中にアメリカの神学界で間接的に接したバルト神学の内容を一部紹介するにとどまっていたという事実である。ただ、鄭が残した個人著作であり、韓国プロテスタント神学の重要な著作である『キリスト教神学概論』(1939)を執筆した時、自らの神学形成とその立場についてカール・バルトが大きな影響を及ぼし、彼の著作の相当部分がバルト神学に影響を受けた結果であると告白している。

> 「私は『信仰における保守主義であり、神学において自由主義』という立場をとる。神学をあえて自然神学と啓示神学の二つに区分して、その中で一つだけ私のものとして選べというような貧窮な質問をするとすれば、私はシュライエルマッハーやリチュルやバルトが躊躇なく選択するだろう福音主義的な立場における啓示神学を選ぶであろう。しかし私は、その啓示が人間の経験論と実際上でも本質的に区分されるとは思っていない。**私自分は、神学的に見るとリチュルから多くを学んだ。したがって、カントが好きである。しかし私はある意味、決して『リチュリアン』ではない。この本を読んだ人は、私がいかほどバルト神学の根本精神に賛同しているかを容易に見つけるだろう。**経験論的な神学が少し変に啓示論的な神学と結合され、相反する両極端を共に持とうとするという印象を受ける人もいるかもしれない。しかし私がもし神の絶対啓示と人間の有限性を強調したものがあれば、これは「全てが神であり、人は何もない」という立場からではなく、私たちの実際の宗教生活において私たちの信仰が神の恩寵に対する感激と

[9] 朱在鏞, 『韓国그리스도教神学史』(서울: 大韓基督教書会, 1998), 114.

信頼と服従の敬虔なキリスト教意識を表現しようというものである。私は啓示が歴史であることを信じている。そして歴史はそれが神の創造と摂理の下にある以上、啓示であることを信じている。このように一般的啓示を容認するとしても、決して特殊的啓示を否定しているといういかなる理由も成り立たない。」[10]

解放以後から活躍した韓国の代表的なバルティアン(barthian)たち、すなわち尹聖範(ユンソンボム)、徐南同(ソナムドン)、宋昌根(ソンチャングン)、金在俊(キムジェジュン)、鄭大爲(ジョンテウィ)、朴鳳琅(パクボンラン)、朴淳敬(パクスンギョン)、全景淵(ジョンギョンヨン)、池東植(チドンシク)、洪顯卨(ホンヒョンソル)、蔡弼近(チェピルグン)、金喆孫(キムチョルソン)、文益煥(ムンイッカン)などの韓国の神学者たちは、そのほとんどが1930-40年代に日本の各神学校で学んだ人々であった。

1920-30年代に日本へ留学した大部分の韓国人神学生は、日本的観点によって構築されたバルト神学に陶酔し、多大な影響を受けた。[11]金在俊は、1928年に青山学院神学部の卒論のテーマを『カール・バルトの超越論』であり、池東植は日本神学校で6年間勉強した後、提出した論文はバルトの宣教神学(宣布神学)を分析した『宣教論』で、その原稿を『十字架の神学叢書(東京:十字架の神学社、1941)に投稿し、第13章「宣教論」として日本語で掲載された。尹聖範は回顧談で「同志社はバルト神学の紹介の先駆者」であり、そのことがその後自身が「バルト先生の下で勉強する一つの契機になったのではないか」[12]と述べている。そして同志社は「私の神学や思想の発展の血となり肉となったことは言うまでもありません」[13]と述べた。1940年代初に日本神学校に留学した金觀錫(キムグァンソク)と朴鳳琅などの回顧録を見ても、当時日本のバルト神学の拠点であった日本神学校に多数の現代韓国神学界の指導者が学んでいた。

「1年後に再び神学を志願した。今度は東京にある青山学院と日本神学校の2ケ所に志望した。 しかし、父は神学の勉強を極力反対し、仕方なく頭を使い、早稲田大学文学科に志望すると嘘をついた。すると、父は咸興警察署へ行って日本に旅行する許可書を得てくれた。二回目の日本旅行はあまり困難ではなかった。東京へ行って2年前に日本神学校に入学していた全景淵(ジョンギョンヨン)博士が案内をしてくれた。東京にはもう全澤鳧(ジョンテクブ)兄が全景淵博士とともに先に入学していたが、身体が弱くて休学中であった。当時の日本神学校には金瀅覩(キムヒョンド)、朴永出(パクヨンチュル)、文益煥(ムンイッカン)牧師も2年先輩で、文の弟文東換(ムンドンファン)博士、朴鳳琅(パクボンラン)博士、金喆孫(キムチョルソン)などは私と同期生として入学した。私が入学した1年後に張俊河(チャンジュナ)氏が入学した。金正俊(キムジョンジュン)、趙善出(チョソンチュル)牧師は当時青山学院で学び、安炳茂(アンビョンム)、張河龜(チャン・ハグ)氏は上智大学で修学していた。」[14]

---

[10] 鄭景玉, 「序論」、『基督敎神學概論』, (春川: 三元書院, 2010 年改訂版), 39.

[11] 洪伊杓,『日帝下 韓國基督敎의 日本 認識』, pp. 256-258.

[12] 学校法人同志社, 『同志社時報』, 第66号、1979年3月, p. 61.

[13] 学校法人同志社, 『同志社時報』, pp. 61-62.

[14] 金觀錫, "나의 回顧 : 時代의 激浪을 넘어," 『이 땅에 平和를 : 70 年代의 人權運動』(金觀錫牧師古稀記念 文集出版委員會, 1991), 231.

「長老教系統の日本神学校は150人定員であったが、1942年当時に3年課程の本科には朴永出(パクヨンチュル)、金瀅覩(キムヒョンド)、池東植(チドンシク)、黄材景(ファンチェギョン)、吳テクァンなどがおり、2年課程の予科には全澤鳧(ジョンテクブ)、文益煥(ムンイッカン)、文東換(ムンドンファン)、全景淵(ジョンギョンヨン)、金観錫(キムクァンソク)、張ビョンギル、朴鳳琅(パクボンラン)、金喆孫(キムチョルソン)、白理彦(ペクリオン)、張俊河(チャンジュナ)などが通った。張俊河はこの時東京で親しくなった全澤鳧、朴永出、文益換・文東換兄弟、全景淵、金観錫、朴鳳琅などと共に解放後『思想界』を主導する同志として活躍した。」[15]

戦時下でもこのように活発に日本への韓国人神学留学生が急増したことは、それほど韓国の神学校が欧米の最新神学を十分に提供していなかったことを示し、それに対する学生たちの不満が自ら日本の神学界に注目する契機を与え、理想となっていたと言える。金觀錫の回顧録を見ると、留学当時の日本の神学界とキリスト教界にバルト神学がどれほど影響を与えていたのかを再度確認することができる。

「当時、日本の神学的な雰囲気はアメリカやイギリスよりドイツ神学、特にカール・バルトやエミール・ブルンナー(Emil Brunner)を中心にした危機神学、あるいは実存主義神学に重きが置かれていた。教会音楽もイギリス、アメリカの作品よりドイツ系統の教会音楽を好む趨勢であった。当時の神学生として最も羨ましく思ったのは、バルトの『教義学』全集を所藏して読破する事であった。戦争中であったので、この全集を手に入れるのは大変で、また高く、貧しい学生としては到底購入することができなかった。白理彦(ペクリオン)牧師は崇徳食堂を経営することで比較的に富裕な生活をしていた。私たちのクラスでは彼だけがバルトの『教義学』全集を持っていた。」[16]

洪伊杓は、このような留学現象を「内地神学の受容及び神学的な着想」の過程として評価しながら「1920-30年代における日本の神学界に留学した初期の韓国神学者たちは、ほとんど日本的な観点に基づくバルト理解に大きな影響を与えられた。いわゆる『内地神学』のバルト理解の下で、再びその多くが「バルティアン」と自任し、いわゆる新正統主義神学を韓国キリスト教界に紹介することに大きく貢献した」[17]と評価する。

解放までの韓国キリスト教出版界では、バルト関連書籍を全く翻訳することが出来なかった。しかし、日本へ留学し、帰国した何人かの神学生によってバルト神学が教界雑誌などで少しずつ紹介され始めた。例えば、培材(ペジェ)学堂出身のメソジスト教会青年であった金恩雨(キムウンウ)が、延禧専門学校を卒業した後に渡日し、立教大学でバルトの倫理学を学び、帰国後『監理会報』に「バルトのキリスト教倫理

[15] 朴鳳琅, “神學生　張俊河　兄,” 『光復 50 年과 張俊河-張俊河先生 20 週忌追慕文集』(1995), 474.
[16] 金觀錫, “나의 回顧 : 時代의 激浪을 넘어,” p. 234.
[17] 洪伊杓,『日帝下 韓國基督教의 日本 認識』, pp. 257-258.

学」を9回にわたって連載した。[18]彼は立教での生活を定着させるまで日本神学校でも修学したが、そこは前述したように、当時バルト神学を最も積極的に受け入れた本拠地であった。[19]

また『監理会報』では、日本人の平海一成牧師のバルトに関する解説文を、1942年7月15日から計9回連載した。[20]当時の編集部は、「今日のキリスト教は転換期に置かれている。したがって、キリスト教神学も転換期に立たされている。今日、私たちの大きな課題はもちろん『日本的キリスト教の建設』にある。ここにキリスト教神学界の主流思潮を紹介し、私たちの『モデル』にしようと考える。今回はまず平海一成牧師のバルト神学を紹介する」[21]と連載の意図を説明している。また、その頃の日本神学校校長であった村田四郎も『監理会報』にバルトに関する文章を寄稿した。[22]15年戦争が持続していたこの時期に、バルトを韓国に積極的に紹介しようと考えた理由は、いわゆる「日本的キリスト教」建設のためにバルト神学が役立つと政治家及び宗教指導者たちが判断したからである。当時、日本神学校の校長であった村田四郎もバルトに関する文章を寄稿した。彼は朝鮮半島にもバルトが紹介されなければならない理由を次のように述べた。

> 「自由思想の激しい風が迫る暴風の中で、基督教会が気力のない歩みに移ろうとしている時、突然世界大戦が襲って来た。教会は『此の世』から嘲笑されるだけではなく、自らの存在が何かと疑惑を持たれ、深刻な自己反省をせざるを得なかった。その時に教会が直面した問題を根本的にやり直す必要があったが、誰もが大胆に発言したり争うに値する準備もなかった。歪曲した形式的な伝統主義と無信仰の歴史主義に巻き込まれて流されるように見えた時、カール・バルトと彼の一群が世界の片隅から力強く叫びながら奮起して来た。それはますます強くなり、ますます広く全世界に波及することになった。(…) 本邦(日本帝国- 論者註)でもバルトに対する議論を長い間行う人々がいるようだが、それらの多数もやはり道聴塗説の類に過ぎないので、本当にバルトの研究を深く追求する人々はわずか少数ではないか。彼を研究することは、生活力のある問題を新たに反省させ、福音を力強く把握させることに良い指示になるのは間違いないと言える。(…) そのような意味で、バルト研究は深い意義を持っていると確信する。」[23]

村田は金観錫、全景淵、朴鳳琅など、1940年代初に日本神学校に留学した韓国人留学生たち

---

[18] 『監理會報』1942 年 7 月 14 日 以後から連載され、現在は 3 回と 5-9 回目は史料が確認出来るが、1-2 回と 4 回目の文献は欠号であるので確認出来ない。

[19] 金恩雨, “나의 學窓回顧,” 『延世春秋』1957 年 10 月 21 日. p.4.

[20] この連載が終了した翌年から金恩雨のカール・バルトに関する新しい連載が始まった。

[21] “神學問題- 빨트(バルト)神學에 對한 中心問題,” 『監理會報』, 1942 年 7 月 15 日, p.8.

[22] 「現在の東京にある日本神學校村田四郎氏のバルトに対する評論を参考として紹介し、この文章をまとめようとする。」；平海一成、「빨트(バルト)神學에 對한 中心問題-結論」、『監理會報』、1942年9月23日、p.3.）

[23] 村田四郎(黄材景譯), 「카알 빨트(Karl Barth)」、『監理會報』、1942年9月23日、p.4.

に学問的な刺激を与えた人物である。当時、日本で流行ったカール・バルト神学についても、村田は思潮の流れを主導した代表的な神学者の一人だった。金観錫の回顧録を見ると、留学当時の日本のキリスト教界でバトル神学がどれほど多く議論されていたかが再確認できる。

3) 日本でのバルト神学に対する熱風と歪曲

この当時、韓国に導入されたバルト神学の潮流について、洪は「15年戦争期を経てファシズム化した日本の政治状況下で日本の神学者たちはバルトを教会の非政治化と御用化を進めるために利用し、このような風潮が韓国神学界にも1930年代以後からそのまま輸入された」[24]とみなしている。深井智朗も「翻訳が、その著者が生み出された社会的なコンテクストやその国の学術的な動向から完全に切り離されて、紹介される場合がある」[25]と指摘し、「奇現象に近かった日本のカール・バルト神学受容史」について次のように評価する。

> 「戦争中に『同盟国ドイツの神学者としてのバルトから学ぶ』というまさに社会的コンテクストから切り離された神学の営みが理論上は可能になった。そしてそれは政治的・宗教的偽装でもあった。それによって事実カール・バルトは戦時中も読みつけられるのである。」[26]

そして深井は、「たとえ戦争や信仰の問題が危機にさらされるような状況であっても、ひたすら教会の中で『何事もなかったかのように』神学をすることが今日の神学がなすべきことだという結論を引き出した」[27]と批判した。すなわち日本のキリスト教が戦時体制下で、現実と乖離した純粋な宗教的思弁と学問作業に集中することができる適切な神学としてバルト神学を選択したという批判が可能になる見解である。[28]

2. 敗戦以後、日本のカール・バルト受容の変遷と出版の動向

15年戦争が続く1930-40年代の戦時体制下で、日本の教会と神学界はバルトの「神と人間の間に存在する垂直的関係性」を一つの「断絶性」として理解し、それを現実の政治とは距離を置いて世の中と教会の分離を強調するための手段として活用した。教会の非政治性と国家権力への批判を警戒した日本政府としてはバルトの神学は当前歓迎され、そのような脈絡の中で日本におけるバル

---

[24] 洪伊杓,『日帝下 韓國基督教의 日本 認識』, p. 253.

[25] 深井智朗,『思想としての編集者-現代ドイツ・プロテスタンティズムと出版史』(東京:新教出版社、2011), p. 148.

[26] 深井智朗, 『思想としての編集者』, p. 149.

[27] 深井智朗,『思想としての編集者』, p. 149.

[28] このような日本における積極的なバルト受容過程に問題はなかったのかについて究明する批判的な共同研究の成果が2009年に書物として出版された。; バルト神学受容史研究会 編, 『日本におけるカール・バルト-敗戦までの受容史の諸断面』(東京: 新教出版社, 2009).

トの受容は歪曲された状態で翻訳、波及された。そして、日本におけるバルト受容は韓国の留学生に少なくない影響を及ぼした。

しかし、1945年の敗戦直後、日本のキリスト教会と神学界は、非政治的神学として扱われて来たバルト神学が不義なるドイツ・ナチスに抵抗、闘争した英雄的な神学者として再評価する作業を始めたことに衝撃を受けた。その結果、日本のキリスト教出版界では山本和が著した『政治と宗教 ：キリスト者バルトはどう闘ったか』(1947)のような書物が出版され、バルトの著書の中でも『教会と国家』(1954)などが紹介され始める。金觀錫など日本神学校に在学した留学生たちが通った信濃町教会の福田正俊牧師も現場で働きを担う牧師であると同時に、代表的なバルト研究者であった。[29]彼も戦時下末期には政府から強要され戦争協力へと流れていった自らを深く咎めて辞任する。敗戦直後、福田牧師の説教「懺悔の深淵より」によると、当時の苦悩を垣間見ることができる。

> 「(コリント後書7:10-11) われわれは今神から最も痛切な、最も真剣な民族的な自己反省を求められているときであると信ずるが、単に頭を叩いたり、髪の毛をむしったりする程度の自己反省からは、とうてい真剣な反省は生じないであろう。もし万一われわれが負け戦は辛いもの、戦争は儲からぬものという程度の、損得から打算した反省しかなしえないなら、また国の内外に与えたことが苦い戦争体験とならず、あたかも戦争を抜きにしたかのような状態がつづくなら、どうであろうか。われわれの思想のどこに傷痕がのこり、それがどのような自己批判や自己深化の機会となっているのであろうか。もしそのようなことが現れていないならば、それはただ国民的に頭を掻いて恐縮しているというに過ぎないであろう。私はそれでは祖国は真に立ち上れないと信ずる。実際『世の憂は死を生』ずるのである。戦争の真実の受け取り方の足りなさが今日の危機の深い原因である。」[30]

福田は、1967年に日本基督教団議長声明として発表された「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」に倣い、1973年に『福音を恥とせず ： 聖書・信仰告白・戦責告白』[31]を

---

[29] 福田正俊はカール・バルト研究を追求し多くの論文を発表したが、1941年に出版された著作『恩寵の秩序』は 「神認識」、「聖霊の活動について」、「福音的教会の本質」などの章とともに、この本の最後の章が「カール・バルトの神学に関する研究(1), (2)」である。まず(1)では「基督論的基調について」をテーマとして「神中心的立場とキリスト中心的立場の一致」、「御言葉の受肉」、「復活の光が映した十字架 - 復活の神学と十字架の神学」などを扱った。(2)では、「説教の本質」というテーマで、「宣教の問題性」、「教会の諸機能における宣教の位置」、「説教の本質」などを扱った。(福田正俊, 『恩寵の秩序』(東京: 長崎書店, 1941); 福田正俊, 『恩寵の秩序』, 181-229; 福田正俊, 『福田正俊著作集』第2巻, 神学論文集(東京: 新教出版社, 1993), pp. 24-61.)

[30] 福田正俊, 「懺悔の深淵より」, 1946年10月の阿佐ヶ谷教会, 1947年8月の高知高等学校青年礼拝。; 福田正俊, 『福田正俊著作集』第1巻, 説教集(東京: 新教出版社, 1993), p. 81.

[31] 福田正俊, 雨宮栄一編, 『福音を恥とせず ： 聖書・信仰告白・戦責告白』(東京: 日本基督教団出版局, 1973).

日本基督教団出版局から発刊し、帝国主義時代及び戦時体制下で日本のキリスト教会が犯した罪を絶え間なく懺悔しなければならないと主張した。このような敗戦以後の反省と努力は、その後のバルト神学の理解に根本的な変化を与え、また新しい次元のバルト旋風を引き起こしたのである。

また晩年にはそのような「教会と国家」の関係について長年苦悩した末に著した論文「教会と国家: ロマ書13章の釈義を中心として」[32]を1982年に発表し、正しい「教会と国家」の関係論を定立するために最後まで奮闘した。このような敗戦以後の懺悔への努力は、敗戦以後のバルト神学受容の根本的な変化と共に新しい次元のバルトブームを引き起こしたのである。

洪は、このような「第2のバルト神学に対する熱風」について「『内地神学』の自己中心的な傲慢さが敗戦と同時に米国を新たな内地として設定する『日本の外地化』という空虚感に転換され、極大化された米国に対するコンプレックスによってバルトを再び新しく利用し始め、彼とともにディートリヒ・ボンヘッファー(Dietrich Bonhoeffer)などドイツ・ルター派教会内部の少数抵抗勢力の人々も一緒に注目された」[33]とした。深井は、戦時下はもちろん戦後の日本神学界及び出版界のバルト・シンドロームは、「社会的コンテクストから切り離されて翻訳紹介される時に起こる問題の典型的な事例」[34]だったと批判した。下の表を見ると、日本出版界において敗戦直後から1960年代まで絶頂に至るバルト・ブーム現象を確認することができる。それに比べ、韓国におけるバルト研究及び出版状況は相対的に着手の段階に過ぎなかったことがわかる。

<日本の敗戦(＝韓国の解放)以後におけるカール・バルト書籍の出版動向比較>

区分	日本	韓国
敗戦直後(1945-49年)	山本和,『政治と宗教 : キリスト者バルトはどう闘ったか』(1947) 菅円吉,『バルト神学』(1948) 『啓示・教會・神學: 證人としてのキリスト者』(1949)[35]	『福音과 律法』(*Evangelium und Gesetz*)과 『使徒信條』(*Credo* (1949年、忠清南道大田で柳東植、朴淳敬、許ヒョクなどが翻訳出版を試みたが、朝鮮戦争のため挫折)
1950年代	『降誕』(1950) 『イエスは主なり』(1950) 近藤定次,『バルト神學における神と人間』(1950)	『教會와 禮拜』(1953) 『그리스도人의 生活』(1954) 『教義學概要: 基督教의 本質』(1957)

[32] 1982年9月27日から29日まで松山で開かれた講演会でこの内容について発表した。; 福田正俊,『福田正俊著作集』第2巻, 神学論文集(東京: 新教出版社, 1993), pp. 391-413.

[33] 洪伊杓,『日帝下 韓國基督教의 日本 認識』, p. 255.

[34] 深井智朗, 『思想としての編集者』, p. 150.

[35] 山本和, 『政治と宗教 : キリスト者バルトはどう闘ったか』(東京: 香柏書房, 1947); 菅円吉, 『バルト神学』(再版)(東京: 弘文堂書房, 1948); カール・バルト, 井上良雄譯, 『啓示・教會・神學: 證人としてのキリスト者』(東京: 新教出版社, 1949).

	村上俊,『ルッテルとバルト研究』(1950) 『ヒュー マニズム』(1951) 『教義學要綱』(1951) 『東と西の間にある教会』(1951) 『ロマ書』(上/下, 1952-1956) 『死人の甦り』(1952) 『福音と律法: 附三つの説教』(1952) 『山上の垂訓』(1953) 『信仰告白: ジュネーヴ教会信仰問答講解』(1953) 『教會と國家』(1954). 『キリスト教倫理1: 序説・神の前での自由』(1954) 『キリスト教倫理2 : 交りにおける自由』(1954) 『キリスト教倫理3: 生への自由』(1954) 『キリスト教倫理4: 限定における自由』(1954). 『キリスト教の教理: ハイデルベルグ信仰問答による』(1954) 『われ山に向いて眼をあぐ』(1955) 『モーツァルト』(*Mozart*, 1956) 『勝利の信仰』(1958) 『和解論の対象と問題』(ㅈ관, 1959). 『和解論』(1959-1961)[36]	코닐리우스 반틸,『칼 바르트는 正統神學者가 되었는가?』(1959)[37]

[36] カール・バルト，秋山憲兄，蓮見和男共訳，『降誕』(東京：新教出版社，1950)；カール・バルト，トゥルナイゼン，井上良雄譯，『イエスは主なり』(東京：新教出版社，1950)；近藤定次，『バルト神學における神と人間』(東京：新教出版社，1950)；村上俊，『ルッテルとバルト研究』(京都：比叡書房，1950)；カール・バルト，成瀬治譯，『ヒュー マニズム』(他二編)(東京：新教出版社，1951)；カール・バルト，井上良雄譯，『教義學要綱』(東京：新教出版社，1951)；カール・バルト，森岡誠一，森岡巌共訳，『東と西の間にある教会』(東京：新教出版社，1951)；カール・バルト，吉村善夫譯，『ロマ書』(上/下)(角川書店，1952-1956)；カール・バルト，広安孝夫訳，『死人の甦り』(東京：復活社，1952)；カール・バルト，井上良雄訳，『福音と律法：附三つの説教』(東京：新教出版社，1952)；カール・バルト，トウルナイゼン共著，蓮見和男訳編，『山上の垂訓』(東京：新教出版社，1953)；カール・バルト，小平尚道訳，『信仰告白：ジュネーヴ教会信仰問答講解』(東京：新教出版社，1953)；カール・バルト，井上良雄，蓮見和男譯，『教會と國家』(東京：新教出版社，1954)；カール・バルト，鈴木正久編，『キリスト教倫理 1：序説・神の前での自由』(東京：新教出版社，1954)；カール・バルト，鈴木正久編，『キリスト教倫理 2 ：交りにおける自由』(東京：新教出版社，1954)；カール・バルト，鈴木正久編，『キリスト教倫理 3：生への自由』(東京：新教出版社，1954)；カール・バルト，鈴木正久編，『キリスト教倫理 4：限定における自由』(東京：新教出版社，1954)；カール・バルト，井上良雄訳，『キリスト教の教理：ハイデルベルグ信仰問答による』(東京：新教出版社，1954)；バルト，トウルナイゼン共著，井上良雄訳，

1960年代	『著作集 : 道德的人間と非道德的社會』(1960) 『僕としての主イエス・キリスト』(1960-1961) 『バルト自伝』(1961) 『ローマ書新解』(1962) 『聖金曜日』(1962) 『福音主義神学入門』(1962) 『祈り』(1963) 『イスカリオテのユダ: 神の恵みの選び』(1963) 『共産主義世界における福音の宣教』(1963) 『聖霊とキリスト教生活: 付説教四篇』(1965) 『バルトとの対話』(1965) 『政治·社會問題論文集』(1969)[38]	『聖書 안의 새로운 世界』(1964) 『휴매니즘과 文化』(1964) 『恩寵의 選擇 및 福音과 律法』(1964) 『로마서 小講解』(1966) 尹聖範,『칼 바르트』(1968)[39] (1970年代初盤) 韓國바르트學會編,『바르트神學 研究』(바르트記念 論文集, 1970) H. R. 매킨토쉬,『現代 神學의 先驅者들 : 쉴라이에르마허로부터 바르트까지』(1973)[40]

『われ山に向いて眼をあぐ』(東京: 新教出版社, 1955); カール・バルト, 小鹽節譯, 『モーツァルト』(Mozart)(東京: 新教出版社, 1956); カール・バルト, 井上良雄譯, 『勝利の信仰』(東京: 新教出版社, 1958) ; カール・バルト, 井上良雄訳, 『和解論の対象と問題』(初版)(東京: 新教出版社, 1959); カール・バルト, 井上良雄訳, 『和解論』(東京: 新教出版社, 1959-1961).

[37] 카알 바르트, 장하구訳, 『教會와 禮排』(서울: 思想界社, 1953); 칼 발트, 池東植 訳, 『그리스도人의 生活』(서울: 思想界社, 1954) ; 카라 바르트, 全景淵 訳, 『바르트 教義學概要: 基督教의 本質』(서울: 聖文學舍, 1957); 칼 바르트, 全景淵 訳, 『바르트 教義學概要 : 基督教의 本質』(서울: 聖文學舍, 1957); 코닐리우스 반틸, 이상근 訳, 『칼 바르트는 정통신학자가 되었는가?』(釜山: 성문사, 1959).

[38] バルト, ニーバー, 井上良雄外譯, 『著作集 : 道德的人間と非道德的社會』(東京: 河出書房新社, 1960); カール・バルト, 井上良雄訳, 『僕としての主イエス・キリスト』(上, 中, 下)(東京: 新教出版社, 1960-1961); カール・バルト, 佐藤敏夫訳(解説), 『バルト自伝』(東京: 新教出版社, 1961); カール・バルト, 川名勇訳, 『ローマ書新解』(東京: 新教出版社, 1962); カール・バルト, トゥルナイゼン共著, 井上良雄訳, 『聖金曜日』(東京: 新教出版社, 1962); カール・バルト, 加藤常昭訳, 『福音主義神学入門』(東京: 新教出版社, 1962); カール・バルト, 川名勇訳, 『祈り』(東京: 新教出版社, 1963); カール・バルト, 川名勇編訳, 『イスカリオテのユダ: 神の恵みの選び』(東京: 新教出版社, 1963); バルト(バルト, Karl), ハーメル(Hamel, Johannes), 児島洋訳, 『共産主義世界における福音の宣教』(東京: 新教出版社, 1963); カール・バルト, 蓮見和男訳, 『聖霊とキリスト教生活: 付説教四篇』(東京: 新教出版社, 1965); カール・バルト, ゴッドシー編, 古屋安雄訳, 『バルトとの対話』(東京: 新教出版社, 1965); カール・バルト, 村上伸, 雨宮榮一, 井上良雄譯, 『政治·社會問題論文集』(東京: 新教出版社, 1969).

[39] 칼 바르트, 朴鳳琅, 全景淵 編訳, 『聖書 안의 새로운 世界』(서울: 香隣社, 1964); 칼 바르트, 朴鳳琅, 全景淵編譯, 『휴매니즘과 文化』(서울: 香隣社, 1964); 칼 바르트, 朴鳳琅, 全景淵 編訳, 『恩寵의 選擇 및 福音과 律法』(서울: 香隣社, 1964) ; 카알 바르트, 全景淵 訳, 『로마書小講解』(서울: 大韓基督教書會, 1966); 尹聖範, 『칼 바르트』(서울: 大韓基督教書會, 1968).

[40] 韓國바르트學會編, 『바르트 神學 研究』(바르트 記念 論文集)(서울: 大韓基督教書會, 1970); H. R. 매킨토쉬, 金在俊 訳, 『現代 神學의 先驅者들: 쉴라이에르마허로부터 바르트까지』(서울: 大韓基督教書會, 1973).

3. 解放以後、韓国におけるバルト研究とキリスト教出版界の主体性回復への努力

1) 解放以後における韓国神学生の自発的なバルト研究

日本のいわゆる「内地神学」がこのようにバルト神学を積極的に受容していた状況と比べる時、韓国の神学界の状況は不毛な地であった。しかし、韓国でも日本の状況に関わらず「バルト、 ティリッヒ、 ニーバー」などの新正統主義の神学を主体的に受容しようとする努力と試みが存在した。解放直後、柳東植(ユドンシク)、李(イ)ヨンビン、朴淳敬(パクスンギョン)、 許焱(ホヒョク)、鄭(ジョン)デホなどの若い神学者たちが神学研究会を結成してカール・バルトやキェルケゴールなどを学習し、彼らの代表著作の翻訳出版を試みた。

> 「神学的な混沌の中で、自力で神学を模索した同級生たちが若干いた。朴淳敬、許焱、鄭デホ、柳東植がそうである。(…) 私たちはバルトから学んだ神学を継続した。神学を学問的により深く追い求めるために朴淳敬氏と鄭デホ氏はソウル大学大学院の哲学科に入学した。」[41]

彼らはバルトの代表作である『使徒信條』(*Credo*)と『福音と律法』(*Evangelium und Gesetz*)をハングルに翻訳し、その成果を出版物としてこの世に送った。

> 「私たちはバルト神学を韓国の教会と神学界に紹介しようとした。我々バルト神学のサークルは、夏と冬の休みになると、大田(忠清南道－筆者註)に集まってバルトの著書を翻訳した。まず『福音と律法』を翻訳し、ある出版社に印刷を頼んだ。出版費は大田の某紡織工場の管理人として私たちの神学作業を支援する信仰心篤いある長老が負担した。(…)まずこの本を翻訳し、紹介しようとした理由は二つある。第一に、韓国のキリスト教は支配主義的な外勢の宣教によって始まったため解放(福音)のためではなく支配や拘束(律法)を支える宗教として始まった。そのため韓国の教会が持つ信仰理解は今も「霊魂の救いを目指す律法主義」から解放されていない。(…)これは、すなわち福音的信仰を持った者らは社会的・政治的生活の中で人間についてより深い責任感を持って行動するということである。第二に、翻訳したバルトの書物は『使徒信條』であった。(…)翻訳の動機は韓国の教会と神学が教祖主義的な色眼鏡で聖書を読むことなく、むしろ変わって行く現実の中で聖書を読み直すことによって時代状況に相応しい信仰告白をしようとしたのである。同時に聖書を読む立場は、聖書が書かれた時の予言者的、使徒的立場をいつも眼中に残さなければならないことは勿論である。残念ながら、この二つの書物は販売されることもなく、朝鮮戦争の犠牲になってしまった。」[42]

---

[41] 이영빈, 『境界線』(서울: 信仰과 知性社, 2005), pp. 67-69.

[42] 이영빈, 『境界線』, pp. 69-70.

解放直後、彼らの自発的なバルト研究会の活動は、いわゆる「内地神学」的なバルト受容の限界を乗り越えようと労力した一つの試みとして評価することができる。すなわち、韓国の主体的なバルト受容史の最初の歩みとして。しかし、詳しく調査すると、上記の二冊はすでに日本で『使徒信條』(1936)[43]及び『福音と律法』(1942)[44]というタイトルで翻訳出版された状況であった。植民地時代に日本語を国語として学ばなければならなかった彼らは、和訳の二冊をもドイツ語原文とともに参考にしたはずである。

しかし、このような努力と意義ある試みにもかかわらず、1950年に勃発した朝鮮戦争によってそのような主体的な欧米神学の受容と内面化の機会は後退した。一方、1950年代を経て経済成長とともに急成長した日本のキリスト教出版界は、1930-40年代よりも旺盛に欧米神学の訳書及び研究書を出版し、広範囲にわたる思想研究を支えた。上表からも確認できるバルト関連書籍の出版ラッシュだけを見ても、当時の韓国と比べてその他の神学者たちの出版物がどれほど多かったかが確認できる。

2) 朝鮮戦争以後におけるカール・バルト神学出版の変化

それに比べ、韓国の1950年代のバルト関連著作は、日本神学校でバルト神学を学んだ朴鳳琅と全景淵の個人的な努力、また同志社で学び、その後スイス・バーゼルでカール・バルトから直接師事した尹聖範のバルト評伝の出刊などがあげられるものの、非常に不十分な状態であると言える。朴鳳琅と全景淵の訳書も『教会と礼拝』(1953)、『教義学概要: キリスト教の本質』(1957)、『聖書の中の新しい世界』(1964)、『ヒューマニズムと文化』(1964)、『恩寵の選択及び福音と律法』(1964)、『ローマ書小講解』(1966) などその大部分がすでに日本で翻訳出版されたものがハングルに訳された。

実際、日本神学校を卒業した池東植が1954年に『思想界』出版社の張俊河の支援によりバルトの『キリスト者の生活』[45]を翻訳出版した。この本は、すでに朝鮮戦争の勃発直前に草稿の翻訳が完了した状態だったが、1953年の休戦直後、劣悪な状況下でこの世に出された。『思想界』代表である張が日本神学校に留学しバルト神学に接してその理解も深かったため、積極的に出版を奨励した結果であろう。このように日本神学校留学時の衝撃から始まった翻訳作業であったため、この書物も1940年に日本で翻訳出版された『キリスト教生活』を参照したものである。次の引用文は池が書いた訳者のあとがきである。

「訳者自身はドイツ語が上手くできないため、その難解さで有名なカール・バルトの著作を直

---

[43] カール・バルト，桑田秀延訳，『我れ信ず』（キリスト教思想叢書刊行会，1936）.

[44] カール・バルト，高橋詢訳，『福音と律法』（東京：長崎書店，1942）.

[45] カール・バルト，宮本武之助訳，『キリスト教生活：附誡命の遵守』（東京：長崎書店，1940）.

接紹介するつもりではなかった。それにもかかわらず6.25（朝鮮戦争)の前に初版を出したが、混乱の中で中断されたバルトの叢書を続刊しようとする何人かの友の懇請があったため、(バルトに関する書物が)ないよりは良いと思い、下手な旧稿を直したものがこの小訳である。(…）今までは神学徒たちにとって追従者になるか、あるいは反対になるかの二者択一を促して来た事情があった。しかし彼が提唱した神学思想は今日になってただの流行的な思想の程度を越えて、まさに古典的な地位を占有することになった。(…)したがって、バルト神学を研究することは、まさに信仰の根本問題を探求する事になると同時に、福音の真理を究明する結果になると考える。(…)願わくは、読者諸賢はカール・バルトと彼の神学に賛成しても、あるいは反対しても、一応バルト自身が言っている内容に耳を傾けるように。現代において最も有力な神学者が何を語っているのかに傾聴することは、決して無益な事ではないはずだからだ。終りに、この拙い訳稿を出刊してくださった『思想界』社の張俊河兄と陰で様々な仕事に協力してくださった、その名を列挙することのできないすべての友に再度感謝の意を示したい。1954年5月末日、訳者。」[46]

ここで池東植は「自分がドイツ語に精通していないため」と書いている。これは日本神学校在学当時に池を指導した宮本武之助教授[47]が1940年に日本語で翻訳出刊したということを考えると、この韓国語版は池の日本神学校時代の教科書として扱われていたか、恩師の訳書として読み、感化を得た結果、ハングルで翻訳することを決心したと考えられる。

池以外にも解放直後の状況や、朝鮮戦争直後の韓国の環境は政治的に不安定で、経済的にも劣悪であったので、西欧の最新神学文献をまともに確保することができない状況が続いていた。したがって、1950年代までは、たとえバルトなどの最新神学著述が翻訳されたと言っても、大部分がすでに出版された日本語訳を参考にしてハングル翻訳を試みたと言ってもよいだろう。このような傾向は1960年代初盤まで持続する。[48] 代表的な事例として李快載(イキェジェ)が翻訳し、朴鳳琅と全景淵の名で発行されたバルトの著書『ヒューマニズムと文化』(1964) が挙げられる。[49]訳者である李快載は序文の中で率直に「翻訳のために原文を確保し参照することができなかったことをご承知ください」[50]と読者

[46] 칼 발트, 池東植　訳, 『그리스도人의 生活』(서울: 思想界社, 1954), 38-39.

[47] 宮本武之助は、日本神学校を経て敗戦後から東京神学大学で宗教哲学を教えた。その後、東京女子大学学長およびフェリス女学院院長を歴任した。彼の代表作は『キリスト教倫理学』、『宗教哲学研究』などがある。

[48] 代表的な事例として、李快載が翻訳し、朴鳳琅と全景淵の著者名で出版されたカール・バルトの書物『휴매니즘과 文化』(1964)をあげられる。; 칼 바르트, 朴鳳琅, 全景淵編訳, 『휴매니즘과 文化』(서울: 香隣社, 1964).

[49] 칼 바르트, 朴鳳琅, 全景淵編譯, 『휴매니즘과 文化』(서울: 香隣社, 1964).

[50] 「『キリスト教の使信の現実性』(Die Aktualität der christlichen Botschaft)は1949年9月1日に、『新たなヒューマニズムを向けて』(Pour un nouvel humanisme)というテーマでジュネーブで開催された国際

に理解を求めている。おそらく英文あるいは日文から翻訳したと考えられるが、すでに1951年に翻訳されていた日本語版『ヒューマニズム』(1951)[51]と比べると、李の翻訳本はほとんど文章の構造と漢字用語の採択が日本語訳と一致している。[52]日韓翻訳を比べると、「그리스도교 사신의 현실성」(キリスト教使信の現実性)という論文はそのタイトルから同じで、日本人の訳者が造った「使信」という概念用語もそのまま受け入れられている。

しかし、このように日本の先行研究及び先行翻訳に依存的であった韓国の解放以後の神学界でも、バルトなど最新神学に対する主体的な受容と理解の努力が進められた。前述したように、柳東植、朴淳敬、許ヒョクなど日本へ神学留学を経験しなかった世代の主体的な研究活動は言うまでもなく、日本神学校や同志社のような日本神学界の1930-40年代のバルト神学を直接経験した世代も、解放以後に接することとなったヨーロッパや北米地域での留学経験をもとに日本のいわゆる「内地神学」を経由しない主体的な受容の過程に尽力しはじめる。

その代表的な事例として、日本神学校に共に留学した全景淵と金観錫をあげることができる。全景淵も日本神学校へ留学した際にバルトに初めて接したわけだが、アメリカへの留学生活以後、アメリカ人にとっても難解な『ローマ書小講解』(1966)のドイツ語原典を読み、ドイツ語から直接ハングル翻訳作業を行った。その訳者のあとがきは次の通り。

> 「これはドイツ語原文で Kurze Erklärung des Römerbriefes, Chr. Kaiser Verlag, München, 1956の翻訳である。この英語翻訳は、D.H. van Daalen によって A Shorter Commentary on Romans (SCM Press, London)とされており、1959年イギリスで出版された。この訳文は、このような本も参考にして、ドイツ語原文から訳出したものである。4年前に翻訳が完了したが、その間何回かにわたり表現を改善し修正しながらこのように出版が可能になった。この訳書の隠された来歴も同時に明らかにして、読者とローマ書の精神を分かち合うこととする。この本を出すた

会議で、バルトが神学者代表の一人として講演した内容である。ここでバルトは、キリスト教の使信の立場からヒューマニズムがどのように扱われなければならないかという問題を展開し、『神のヒューマニズム』を提示する。 『ヒューマニズム』(Humanismus)は1950年2月2日に、チュリッヒで講演したものとジュネーブ国際会議の際に様々な分野の代表たちが集まって、『新しいヒューマニズム』に関して講演した内容を紹介し、報告したものである。ヒューマニズムを理解するために良い資料を提供すると信じている。(…) 翻訳に使われた台本は、1950年に発行したEvangelischer Verlag A.G.、Zollikon-zürich出版社発行の『神学研究』(Theologische Studien)第28集、『Humanismus』(「キリスト教の使信の現実性」もこの中に含まれる)と、同じ出版社で1950年に発行した『Menschlichkeit Gotts』の英語の訳本(Scottisch Journal of Theology, Occasional Paper, No.8. Oliver and Boyd, Edinburgh, 1959. “God, Grace and Gospel”, James Strathearn McNabの翻訳)を使用した。この後者の翻訳に原文を手に入れて参照できなかったのは、了解してほしい。1963年10月19日、李快載」 (칼 바르트(カール・バルト),『휴매니즘과 文化』(ヒューマニズムと文化)、韓国語版の訳者の序文)

[51] カール・バルト, 成瀬治譯, 『ヒューマニズム』(他二編)(東京: 新教出版社, 1951).

[52] 洪承杓、『植民地時代における韓国キリスト教出版の動向に関する研究－朝鮮耶蘇教書會を中心に』、延世大学大学院博士論文、2015年、p.296.

めに、基督教書會の編集部の皆さんが尽力してくださった多大なる苦労を常に覚えておきたい。1965年10月5日、訳者、全景淵」[53]

この和訳書は1962年に発行されているが、全景淵は日本語訳書が出版される1年前(1961年)に初訳をすでに完成させていた。すなわち、1960年前後からは日本語訳文への受動的な姿勢から脱皮するためにドイツ語原文を参考にして英文テキストを直接ハングルに訳すなどの主体的な姿勢を見せている。その結果、全景淵による訳書『ローマ書小講解』は以前まで日本語訳本とほぼ同じであった文章形態や漢字語の使用の一致及び類似性がめっきり減る。これは長年の歳月繰り返されて来た日本語神学書からの重訳を克服し、西欧の神学を直接読み、韓国人の宗教的心性と思考方式、そしてハングルの言語的特色に合わせて主体的に受容、翻訳しようとする努力の結実であった。

全景淵のこのような日本神学克服の努力は、バルトの著作『バルト教義学概要』(1957)の翻訳にもよく現われている。以前は、日本で出版された訳書のタイトルもそのまま借用する傾向が強かったが、全は日本語訳の『教義学要綱』ではなく、『教義学概要』というタイトルを採択したのである。後の訳者序文によると、米国・プリンストン大学留学中にその初訳に着手したことが明らかだが、英語圏での留学生活であったにもかかわらず、バルトのドイツ語原典を直接読みながらハングルへ翻訳作業を行ったことを自負する様子が窺える。

「ここに訳述した本は、彼(バルト)の二つの序文にあるように、1946年に第2次世界大戦が過ぎ去った荒廃したドイツで講義したものを翌年スイスの『チォルリコン』出版社から発行したDogmatik im Grundriss, Zollikon-Zürich, 1947.である。訳者はこの本を在米中であったプリンストン神学校で1948年に読む機会が与えられ、バルトの本としては易しく明快なその論致に感服した。したがって我等の国語に訳す志を抱いたが、ボストン大学に移った時にようやく翻訳を始めた。私は演習室でこの本を韓国語に翻訳している途中、主任教授に見つかった。彼もやはり英訳の本を読んでいると言い、ドイツ語で読みながら翻訳する私を注意深く見ている記憶が今も鮮明である。学位取得を目指した米国での大学生活がどれほど忙しいかを知っている人は、そこで第3国の文章を翻訳する事がいかに苦しいことかを理解できるはずだ。それから3年後、学位を終えて帰国する直前にようやく翻訳を完成した。(…)1952年に帰国し、ハングル綴字法を新たに学んで英訳とも対照しながら原稿用紙に移しかえたが、長い間出版することができず机下に保管して置いた。今年の夏にもう一度訂正し再び原稿用紙に記録すると、『思想界』社にお任せすることになったのだ。このような形に落ち着いた後、ドイツ・ハイデルベルク大学で勉強し、すでにバルトの著書『教会と礼拝』を翻訳、バルト教授と出逢い親しくなった張河(チャンハ)

[53] カール・バルト, 川名勇訳, 『ローマ書新解』(東京: 新教出版社, 1962); 카알 바르트, 全景淵譯, 『로마書小講解』(서울: 大韓基督教書會, 1966), pp. 4-5.

亀兄に原著者からの序文を願い出た。張兄が再びバーゼル大学でバルト教授の肉声に毎日接することができたが、バルト教授から学んでいた尹聖範(ユンソンボム)牧師に頼んで韓国語読者への序文と近影一枚を得ることができた。」[54]

このように解放以後、韓国現代神学の未来を担っていた第1世代の神学者グループは、過去に「内地(日本)神学」を経由して最新の神学を受容しなければならなかった屈辱的な状況を主体的に克服するために奮闘した。その結果、全景淵の韓国語版『教義学概要』はその文章の構造や漢字語採択において、6年前に出版された日本語版とは全く異なる結果となった。

このような1960-70年代の主体的な受容の努力の結果、1980年代のバルト訳書を見ると、完全にドイツ語原文から直接に翻訳されたり、英文を一部参照する水準までに変化していった。李ヒョンギがハングルに訳した『福音主義神学入門』(1987)の訳者序文を見ると、ドイツ語原典及び英文翻訳本を模本としてハングル翻訳作業を行ったことを明らかにしている。[55]

3) 最新の欧米神学の積極的な紹介と韓国神学の主体性確立

日本による韓国併合以前の19世紀末から20世紀初までは、「欧米→中国→日本→韓国」のような順序で近代キリスト教出版物が翻訳、紹介された。しかし、韓国併合以後の植民地下において「(欧米+日本)→韓国」の構図に変化し、中国でのキリスト教出版物の影響力が減った一方、 日本で翻訳されたキリスト教出版物が韓国のキリスト教界の出版に大きな影響を及ぼすことになった。このように植民地時代においてキリスト教出版の主導権は「宣教師」(欧米)あるいは「内地」(日本)のキリスト教が握っていたため、韓国人のキリスト教界指導者たちが出版物を選択し、その流れを作り出すような環境にはなかった。英文書籍を翻訳、紹介しても、それはほとんどが西洋宣教師に合わせ制限された保守的で非神学的な内容が支配的であった。結局、聖書註解や教会現場での実践的な側面に役立つ書籍が多数発行されたのである。一方、日本のキリスト教出版界では、バルト関連書籍など当時流行った最新神学が同時に翻訳出版されたが、韓国に紹介された日本のキリスト教訳書のほとんどが信仰の証やキリスト教弁証書のような検証されたベストセラーなどが主だった。したがって、主体的に最新の世界神学の流れを把握し、その受容を主導することができなかった。

しかし解放以後からは、「大韓基督教書会」を掌握していた宣教師グループの編集権も、関西学院神学部出身の金春培(キムチュンベ)や日本神学校出身の金觀錫など韓国人指導者に委譲された。また、彼ら

---

[54] Karl Barth, *Dogmatik im Grundriß* (Zürich: Evang. Verlag, 1947). ; カール・バルト, 井上良雄譯, 『教義學要綱』(東京: 新教出版社, 1951) ; 칼 바르트, 全景淵譯, 『바르트 教義學概要: 基督教의 本質』(서울: 聖文學舍, 1957)、p.7.

[55] 「翻訳において訳者(李ヒョンギ)はドイツ語原文と英文を対照して翻訳した。難解な句節はできるだけ直訳を選んだという事実を付け加えて言っておく。」(カール・バルト、 李亨基訳、『福音主義神学入門』(仁川：크리스챤다이제스트, 1987), p.15.

が日本とアメリカ等での留学経験を生かして初めて西洋神学の思潮を主体的に解釈し、韓国キリスト教界に必要な書籍を取捨選択し、翻訳及び紹介する時代を拓いていった。

このような流れの中で、解放以後の韓国キリスト教出版界がどのような根本的変化を生み出していったのかは、金觀錫の訳書の現況を分析することで把握できる。金觀錫が1957年から本格的に翻訳、紹介した諸本の面々を見ると、すでに日本で翻訳された諸本を検討し市場でその反響が検証されたものを韓国に再び紹介するという消極的な方法から、西欧で最近発行された書籍を中心に選別して欧文(特に英文)からハングルに直接翻訳している。下表から確認できるように、以前は「英文→日文→ハングル」の順で翻訳過程を経たが、金觀錫が翻訳及び出版した諸本の大部分は、未だ日本では翻訳されていないものや、金觀錫より遅れて日本語に翻訳され出版された。異例的に日本語訳本が先に発行されたのは、日本人であるジョゼフ・M・キタガワがアメリカで出版した『東洋の宗教: 近代化をめぐる苦しみ』(1963)程度で、金觀錫による欧米書籍のハングル版翻訳作業は、完全に日本のキリスト教出版界の動向から独立していたことが確認できる。

＜解放以後における金觀錫の翻訳書目録＞

英語	日本語	韓国語
The book of Isaiah, an exposition (1954)	×	『이사야 講解』(1957)[56]
Christianity and civilisation (1949)	『キリスト教と文明』(1975) : 日本が金觀錫訳より遅い	『基督教와 文明』(1960)[57]
Interpreting the Bible to youth (1954)	×	『青年部 聖經教授法』(1961)[58]
Brown, Robert McAfee, *The significance of the church* (1956)	×	『教會란 무엇인가』(1962)[59]

[56] Charles Rosenbury Erdman, *The book of Isaiah, an exposition* (Westwood, N.J., Revell, 1954); 촬스 어드맨, 金觀錫譯, 『이사야강해』(서울: 대한기독교서회, 1957).

[57] Emil Brunner, *Christianity and civilisation* (New York, C. Scribner's Sons, 1949) ; 에밀 뿌룬너, 김관석 옮김, 『그리스도교와 문명』(서울: 한국번역도서, 1960); ブルンナー, 熊沢義宣訳, 『キリスト教と文明』(東京 : 白水社, 1975.3)

[58] J. T. Carlyon, Interpreting the Bible to youth (Abingdon Press, 1954); J. T. 칼리욘, 김관석 옮김, 『청년부 성경 교수법』(서울: 대한기독교서회, 1961)

[59] Robert McAfee Brown, *The significance of the church* (Philadelphia: Westminster Press, 1956); R. M. 브라운, 金觀錫 옮김, 『교회란 무엇인가』(서울: 大韓基督教書會, 1962)

The Protestant and politics (1958)	×	『프로테스탄트와 政治』(1962)[60]
Modern rivals to Christian faith (1956)	×	『信仰과 試鍊』(1962)[61]
A faith for the nations (1957)	×	『宣教와 民族文化』(1962)[62]
Life, death, and destiny, (1957)	×	『삶, 죽음, 運命』(1962)[63]
The meaning of Christ (1958)	×	『그리스도는 누구신가』(1962)[64]
Psychology of religion, (1959)	×	『宗教心理學』(1964)[65]
Rediscovering the church, (1956)	×	『現代人과 教會: 教會의 再發見』(1964)[66]
Guiding Workers in Christian Education (1953)	×	『主日學校教師 가이드』(1965)[67]
The miracle of dialogue, (1964)	『対話の奇跡』(1970) : 日本が金觀錫訳より遅い	『對話의 奇蹟』(1965)[68]
The faith of the Christian church, (1954, 1960)	×	『組織神學概論』(1965)[69]

[60] William Lee Miller, *The Protestant and politics* (Philadelphia, Westminster Press, 1958); W. L. 밀러, 金觀錫, 『프로테스탄트와 政治』(서울: 大韓基督教書會, 1962)

[61] Cornelius Richard Loew, *Modern rivals to Christian faith* (Philadelphia, Westminster Press, 1956); C. 로우, 김관석 옮김, 『信仰과 試鍊』(서울: 大韓基督教書會, 1962).

[62] Charles W. Forman, *A faith for the nations* (Philadelphia, Westminster Press, 1957); C. W. 포만, 金觀錫 옮김, 『宣教와 民族文化』(서울: 大韓基督教書會, 1962)

[63] Roger Lincoln Shinn, *Life, death, and destiny* (Philadelphia, Westminster Press, 1957); 로저 L. 쉰, 김관석 옮김, 『삶, 죽음, 운명』(서울: 大韓基督教書會, 1962)

[64] Robert Clyde Johnson, *The meaning of Christ* (Philadelphia, Westminster Press, 1958); R. C. 존슨, 金觀錫 옮김, 『그리스도는 누구신가』(서울: 大韓基督教書會, 1962)

[65] Paul Emanuel Johnson, *Psychology of religion* (New York, Abingdon Press, 1959) ; 폴 존슨, 金觀錫 옮김, 『宗教心理學』(서울: 大韓基督教書會, 1964)

[66] George Laird Hunt, *Rediscovering the church* (New York, Association Press, 1956) ; G. L. 헌트, 金觀錫 옮김, 대한기독교교육협회 편, 『現代人과 教會: 교회의 재발견』(서울: 대한기독교서회, 1964)

[67] Frank M. McKibben, *Guiding Workers in Christian Education* (New York: Abingdon-Cokesbury Press, 1953) ; F. M. 맥키븐, 김관석 옮김, 대한기독교교육협회 편, 『주일학교 교사 가이드』(서울: 대한기독교서회, 1965)

[68] Reuel L. Howe, *The miracle of dialogue* (New York: Seabury Press, 1964) ; 루우엘 하우, 김관석 역, 『대화의 기적』(서울: 대한기독교교육협회, 1965) ; R.L.ハウ, 松本昌子訳, 『対話の奇跡』(東京: ヨルダン社, 1970).

[69] Gustaf Aulén, *The faith of the Christian church* (SCM Press, 1954); (Philadelphia, Muhlenberg Press, 1960); G. 아울렌, 金觀錫 옮김, 『組織神學概論』(서울: 大韓基督教書會, 1965).

The case for orthodox theology (1959)	×	『正統主義神學』(1967)[70]
Religions of the East (1960)	『東洋の宗教: 近代化をめぐる苦しみ』(1963)	『東洋宗教: 近代化의 苦憫』(1967)[71]
The case for a new reformation theology (1959)	×	『新正統主義神學』(1968)[72]
Parents and religion; a preface to Christian education (1961)	×	『基督教教育序論: 父母와 宗教』(1970)[73]

また、金觀錫の翻訳書は、過去に宣教師が韓国のキリスト者たちに紹介しなかった最新神学の内容が多い。もちろん教会の現場にすぐ適用され得る実践的な方法論を翻訳することもあったが、以前には見られなかった神学思想及び思潮の変化、また神学論争を一目で判断することのできる諸本を選定して翻訳したのである。これは、韓国人神学生を学問的に低い水準にとどめておこうとしたアメリカ人宣教師の神学教育政策から完全に解放され、西欧人の先進的神学研究の成果を主体的に受容し、内面化しようとする重要な試みとして評価できる。

1957年には大韓基督教書会が月刊紙『基督教思想』を創刊し、それまで不十分であったバルト、ニーバー兄弟、ティリッヒなどの最新神学を紹介する。初代編集人及び発行人であった金春培と洪顯卨なども、関西学院神学部出身として日本で初めて欧米の最新神学に接した人物であった。そのような経験をもとに、洪顯卨は解放以後渡米してアメリカ・ユニオン神学校でティリッヒから学び、ラインホールド・ニーバーからは直接論文指導を受けて帰国した。このようなアメリカの神学を韓国に直接紹介するために尽力したことは言うまでもない。その結果、『基督教思想』の創刊号から尹聖範に「カール・バルトの人間構造論」の寄稿を求め、師匠であるラインホールド・ニーバーの「バルトはどうしてハンガリーに関して沈黙を守るか?」という文章も尹が翻訳し掲載された。最新神学の研究者の不足、朝鮮戦争以後の疲弊した経済状況により最新神学の活発な翻訳と単行本出刊の余力が無かった韓国キリスト教界及び出版界には、苦肉の策として「神学雑誌」を創刊して最新神学の精

[70] Edward John Carnell, *The case for orthodox theology* (Philadelphia, Westminster Press, 1959); E. J. 카아넬, 金觀錫譯, 『正統主義神學』(서울: 大韓基督教書會, 1967).

[71] Joseph M. Kitagawa, *Religions of the East* (Westminster Press, 1960); ジョゼフ・M・キタガワ, 井門富二夫訳, 『東洋の宗教: 近代化をめぐる苦しみ』(東京: 未來社, 1963); 죠셉 기다가와(Kitagawa, Joseph Mitsuo), 姜謂祚, 金觀錫共譯, 『東洋宗教: 近代化의 苦憫』(서울: 奎文閣, 1967).

[72] William Hordern, *The case for a new reformation theology* (Philadelphia, Westminster Press, 1959) ; 윌리엄 호오던, 김관석 옮김, 『新正統主義神學』(서울: 大韓基督教書會, 1968).

[73] John Gordon Chamberlin, *Parents and religion; a preface to Christian education* (Philadelphia, Westminster Press, 1961) ; J. 고든 챔벌린, 김관석 옮김, 『기독교교육서론: 부모와 종교』(서울: 대한기독교서회, 1970).

髄を抜粋し、牧師や学者、あるいは大衆に提供しようとの努力を惜しまなかった。

おわりに

1910年の韓国併合以後、政治、経済、社会、文化の領域のみならず、キリスト教をはじめ宗教界も日本の出版界の影響を大きく受けた。この過程で、中国のキリスト教出版界からの影響は朝鮮半島では徐々に弱まり、「欧米 → 中国 → 日本 → 韓国」という近代キリスト教出版界の構造が、「(欧米 + 日本) → 韓国」という図式に変わって行った。しかし、解放以後は「欧米 → 韓国」という構造に再編されながら、それなりに主体的なキリスト教出版の力量確保を試みたのである。このような変化過程において、ついに欧米神学とも異なる韓国神学の独自的な神学が創り上げられ、1970年代以後から模索されはじめた。

植民地支配下では日本の神学界とキリスト教出版界の成果に依存していたが、解放以後からは欧米の神学に直接接し、韓国人の情緒や宗教文化に適した翻訳及び研究成果を出版物として世に送り出しはじめた。そのような意味で、植民地支配下の韓国のキリスト教出版の動向が持っていた神学的な欠乏感は、逆説的に解放以後からはより積極性を持って西欧神学を主体的に受容し内面化する、すなわち韓国化するための努力を生み、キリスト者を刺激する重要な役割を果たしたと言えるだろう。

（ホン・スンピョ　韓国キリスト教歴史研究所研究員）

（翻訳：神山美奈子）